

八戸青年会議所理事長賞

力強く、たくましく

下長中学校 一年 小笠原 柚衣

梅雨真つ只中のある朝、今年も薄紫色に染まったアジサイの花が咲く。もう何年目になるのだろうか。太い枝から無数の細い枝が伸び、先の細かな花びらが雨に濡れている。

母は、植物が大好きだ。広いとはいえない我が家の庭だが、たくさんの草花や樹木が植えられている。だから、春夏秋冬どの季節でも、庭は輝きを失わない。春には小鳥のさえずりとともに、黄色いスイセンをはじめ、球根植物が咲き乱れ、まるで花のじゅうたんのような庭に。夏には暑さに負けずに大小さまざま、色が豊かなアサガオが、青空につるをからめる。暑さがおさまる秋には、コスモスがいつの間にか咲いていて、花が風にやさしくゆれている。冬はしんと降る雪の中に、点々と鮮やかな赤い椿が春を待っている。この他にも、聞いたことがないような、珍しい草花が、庭を色どっている。その中でも、アジサイは梅雨の季節の主役だ。薄い花びらが何枚も重なって、やさしく、繊細な印象を生み出している。どんよりと雨が続くこの日々に、安らぎを与えてくれる。私はこの梅雨があまり好きではなかったが、梅雨の初めにこのアジサイの小さな芽を見つけると、梅雨も悪くないように思えてくるようになった。

この花をいつの間にか好きになっていった私は、ホームセンターなどでアジサイを探しては、そのコーナーに立ち寄るようになっていた。青、ピンク、白など、たくさんの色、ひだになっていく花びら、丸い形の花びら、どのアジサイもそれぞれの魅力を持っている。現在は、品種改良がどんどん進められ、アジサイといっても、数えきれないほどの種類が店に回るようになった。ホームセンターでたくさんの魅力に目が奪われるうちに、このアジサイのことを、もっと知りたいと思った。

そこで、アジサイのことを調べてみることにした。調べてみると、広葉樹の仲間であることが分かった。そのときの私の目は、いつもの二倍ほどに見開いていただろう。まさか、木だとは思わなかった。アジサイのことについて、少しくわしくなれた気がした。さらにくわしく調べてみると、アジサイは、万葉集の中にも詠まれている。「紫陽花の八重咲く如やつ代にをいませわが背子見つつ思はむ」これは、奈良時代、橘諸兄が詠んだ短歌だ。「紫陽花が八重に咲くように、あなたもお元気にあられるよう、この花を見ながらお祈りします」という意味らしい。アジサイは、人を思いやる歌の中にも使われていたのか。私は、奈良時代からこの花があったことに胸が熱くなった。日本の古い歴史に残されていた花が庭にあるのは、少し不思議な感じもした。また、アジサイは、生命力がとてもしっかり。なかなか枯れてしまうことはないし、森に

も力強く生えている。以前、母がアジサイの茎を切って地面にさしていた。断面から根が生え、一つの植物として成長すると、教えてもらったことがある。本当に、生きようとする力が強いと思った。

ふと、窓の外をのぞいてみると、母がいつものように庭の手入れを行っていた。母は一日に一回は庭を回り、手入れをしている。休日はほぼ庭にいて、いつでも過言ではないだろう。当たり前前となった日常風景だ。私は外へ出ることにした。気分転換の意味もあるが、アジサイをもう一度見たいとも思ったからだ。外のさわやかに吹く風と差し込む光がすがすがしい。

「今年は、アジサイの花がたくさん咲いたんだよ。」

アジサイを見ていると、母が言った。昨年は、どういうわけなのか、あまりたくさん咲かなかったのだ。そのときは、あまりアジサイを気にしていなかった。しかし、今思うと、心のどこかになにかがすっぽり抜けてしまった感じがする。今年はきれいにたくさん咲いたことに胸をなでおろす。来年も今年のように、大きな大きな花を梅雨に届けてほしい。

私は庭を回った。最近降った雨で、水が反射しているせいなのか、草花が生き生きとしているように感じる。梅雨は、植物に恵みの水をたっぷりと与えてくれる季節でもあると思った。すると、小さな池のはじめに、何か見慣れない植物が生えていた。

「あつ。」

昨年のさびしい梅雨の季節に種がこぼれたの
だろうか、小さなアジサイが芽を出している。
小さなアジサイは、ひっそりと、しかし力強く、
たくましく、花を咲かせている。